

まとめ

自転車の新たな価値



吉村 洋三
YOSHIMURA Yozo
Life Creation Space OVE
マネージャー

自転車がここ数年急激に見直され、再びブームが到来している。以前と違い一過性で終わることはないだろう。その要因とは何か。そこから生まれる自転車の新たな価値観とは何か。

自転車の価値観の変化

これまで自転車はビニール傘のような存在だった。必要な時にしか使われない。便利なのに置く場所には困る。だから廉価なもので十分。壊れても盗難されても、次の新しい同じ機能商品を必要な時に買えばいい。

30年間、自転車業界に従事している私ですら、そういう考え方が変わることはないと思っていたが、ここ数年、日本人が考える自転車の価値観が変化した様には正直、驚いている。

歴史を紐解くと、1980年以降でも日本における自転車ブームは何度か小さい波として訪れている。それはハードとしての外観的要素が中心であった。マウンテンバイクに代表される個性的なカタチには新しいライフスタイルの要素が詰まっていたし、普段使う自転車と違う「遊び道具」というポジションだった。だから、歴史的背景の中でブームの終演を繰り返し、それは静かに趣味人の道具として今に受け継がれていた。

しかしここ数年は、明らかにこれまでの自転車ブームと一線を画す価値観の創造がみられる。ある人は自転車をエコという言葉の象徴だと捉えているし、ある人は健康という観点から自転車を見直し、ある人は短距離の最速移動手段として積極的に取り入れている。そして、東日本大震災も移動の足として見直される、一つの契機となった。これらは自転車の存在が想像以上の多様性をもって広がっているからに他ならない。

変化の要因

実に多様化した自転車への価値観変化が、この「見直されている」原動力となっていることは間違いない。でも、これが一過性のブームで終わらないのはなぜか。それには二つの要因が挙げられる。

一つ目は、乗ること自体の「爽快感」が持続性を自然に促しているからである。さまざまな理由で自転車を乗り始めた後も乗り続ける最大要因は、脳が喜ぶ「気持ちが良い」という行為だ。エコで始めても気持ち良く感じ、気付かないうちに健康にも寄与している。確かに自転車は自分自身の体力を使って動くものだから、時には体の痛みを伴うし空腹を覚えることもある。しかしそれは、全身を使っている行為だからむしろ当たり前なのだ。それ以上に何かの重労働を強制的に行う時に比べて、ある種の爽快感を伴ってくれる。それこそが自転車に乗り続ける人が増え続けている理由だと思う。

二つ目は、快適に走れる自転車を総じてスポーツ自転車と呼ぶが、これらの自転車でスポーツをしていると感じていない乗り手が大幅に増えたことだ。スポーツをする道具といえば、サッカーボールや野球のバットが挙げられるが、これらのスポーツ用品にスポーツ以外の用途を考えることはほとんどない。しかし、スポーツ自転車は肝心の乗り手がスポーツをしているとは感じていないのである。

移動手段だけの道具から、もっと快適に移動するためにスポーツ自転車がクローズアップされるのは自然な流れでもある。しかしながら、このスポーツ用途で設計された道具をむしろスポーツ用途で使

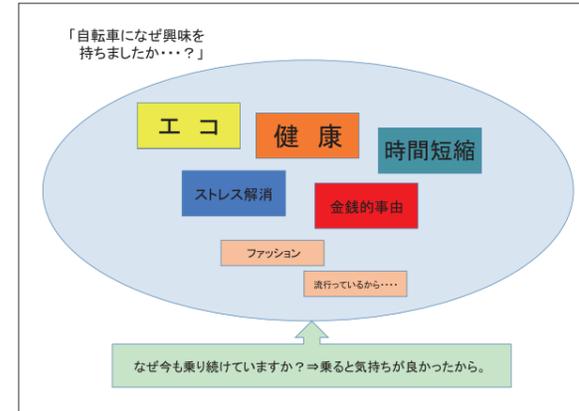


図1 OVE実施アンケート結果

わない、意識しないという観点は、実に興味深いものだ。目的以外の用途を創造することこそが、モノの新しい価値観の原動力となる。「見直されている」という言葉の持つ意味は、自転車業界が何かのキャンペーンをしかけて顧客創出を促したものではない。まさに21世紀型の実に興味深い人間の行動なのである。

ゆっくり走る価値観

私自身は自転車小売店経営を経て、世界的な自転車レースで整備のプロフェッショナルとしてライダーやチームに帯同して、自転車を道具から機材に認識を変え、仕事として自転車に接してきた。当時は自転車はスポーツ道具そのものだった。「より速く、そしてより遠くへ」と機材の限界は優れた人間が引き出した。だからその機材を使う末端の愛好者には、機材ではなく道具として認識してもらえば十分であった。そして、機材は留まることない限界に選手と一緒に挑戦し続ける。



写真1 機能と遊び方がマッチしたマウンテンバイク



写真2 数年前に発表された完成車重量約3.6kgのロードバイク

しかし21世紀を迎える時に、その機材の行き着く先に人間としてのゴールがあるのだろうか考えると、とても不安になった。それが自転車をもう一度考え直すきっかけになった。

だから「ゆっくり走る」という新たな価値観に気付かされたのは本当に最近のことだ。

散走の提案

新たな価値を創造するためにはやはり、人間の思考の変化だけを頼りにしているだけでは何も生まれない。では、自転車の新しい価値とはなんだろうか。私の勤務するLifeCreationSpace OVEでは、その一つの試みとして「散走」という自転車の価値観を提案している。

散走とは文字通り「散歩のように自転車で走る」ことを表した造語だ。実は移動手段の多くは移動スピードを調節し難い。バスや電車、飛行機などはゆっくり移動することを利用者が決められず、自家用車は現状の交通流動では難しい。しかし自転車は交通ルールやマナーを遵守すれば、実はゆっくり移動できる数少ない乗り物の一つでもある。

ゆっくり動くからこそその風景や発見が散走にはいつももある。それは自転車を介して広がる価値観だ。四季を感じるのに何も特別な場所へ行く必要はない。いつも見慣れない景色は、実はいつもの道と一つ違う隣道にたくさんある。朝の静けさ、夜の賑やかさ、まるで映画のスクリーンのように目まぐるしく変わる物語を楽しむことができる。自転車でも、移動速度が速すぎると見えないものがたくさんある。それに気付くには、ゆっくり走らないとわからない。

一般的な自転車の設計では、ゆっくり走る時の安定性と荷物を積載する際の荷重バランスが要求され



写真3 OVEで行っている散走

ている。一方、スポーツ自転車と呼ばれているタイプの場合は、ある一定のスピードで走る時の走行安定性を最優先に作られているため、スピードを落として走ると走行が不安定になり、かなりの技術(スキル)が要求されることになる。速く走るために自転車自体に荷物を積載することを想定していないので、荷物のほとんどは乗り手である人間が直接背負うことになる。だから現代は、人間の自転車に対する価値観が機能を越えてしまっているのではないかと感じるほどである。

究極の自転車のあるべき姿はゆっくり走れるけど荷物をきちんと積載でき、そして長い時間でも軽やかに走れるものだ。実はこのような道具はまだ完成の域には達していない。だからこそ、私を始めとして

道具の担い手には、まだまだいろいろな自転車を作り出せる余地が残っている。

散走の世界

さてもう一度、散走の世界に話を戻したい。

OVEでは散走を体感していただくために、週末に「OVE散走」というプレミアムサイクリングを行っている。東京の南青山にあるショップからスタートすることも多いので、都内の複雑かつ最低限の危険を回避するために参加者の定員は8名としている。スタッフと考え抜いて、これが参加者に楽しんでいただくための最大の定員だと割り出した。もちろんスタッフ数名が

同行する。ゆっくり走りながら何をするかのお題を用意し、参加者には走ることで楽しめるいろいろなモノやコトに集中してもらうことが目的だ。

参加者の多くはスポーツ自転車初体験で、自身で所有していない人がほとんどだ。だからOVEでは、自転車はもちろんのこと、安全に安心して走れるセーフティグッズも用意して、参加者には「自転車で走れる好きな格好で来てください」と連絡している。しかし自転車を楽しむ時に、着替えないといけないという認識があるとは思っていなかった。やはりスピードを出して楽しむ趣味人の専用ウェアをイメージするらしく、参加者の事前問い合わせの多くは「何を着て行けばいいのですか?」だった。

OVE散走では自転車の快適さを体験してもらう時



写真4 スポーツ自転車で優雅に走っている壮年男性(ドイツ・デュッセルドルフ)



写真5 お洒落も楽しむ散走



写真6 OVE散走で参加者の多くが一緒に話せる食事の時間

に大事にしていることがある。それは自転車に乗って何をするかということの導きだ。それは時間を、ゆっくり流れる「時」という単位に換える演出でもあるし、普段ならば車や電車、バスで到着して初めて認識する風景を、その場所に到着するまでゆっくり流れる「情景」に変える仕掛けでもある。そして何より感じて欲しいのは、走るからこそ特別な場所や空間で味わう「食」という楽しみである。参加者は当日初めて会った人ばかりなのだが、ランチの場では多に盛り上がる。食べることは、語らうことを共有する大事な「時」だったと気付かされる瞬間でもある。

自分自身で気付く価値観

今までの価値観であれば、スポーツ自転車だからスポーツをしなくてはいけないという価値観を押しつけられていたが、ここ数年はスポーツ自転車を一般的な自転車として使う人が増えているので、これこそが新しい価値観のスタートになっている。

自転車の新たな価値とは、身近にあった道具が自分の考えていた以上の価値を生むことでもある。それは自転車の道具側からみた価値観の押しつけではなく、あくまでも自分自身がその価値観に気付くことだ。これには少しだけ困難が伴う。冒頭のビニール傘のように価値観を定義づけたモノに、新たな価値観が生まれるはずがないという既成概念が邪魔をするからだ。しかし、自転車の価値観は自転車を眺めているだけでは生まれてこない。ペダルを漕ぎ始めてこそ初めて生まれることもある。

自転車の道具としての機能をスピードだけに求めるならば、それは経験と体力に応じて楽しみが変化するだけだということに、早晩気付かされる。しかしゆっくり走ること、自転車の価値観をゆっくり見いだすことが可能だ。ゆっくり行えば、実はさっきまで

気付かなかった価値観をプレイバックして新たな価値観として加えることも、時には全く別の感動体験を生むことにもなる。

新しい自転車観を楽しむ

日々の移ろいと一緒の速度で楽しめれば、それは自転車の価値観から更に新しい自分だけのライフスタイルになり得る。自転車の新しい価値観は自分自身の中にあったと気付かされる瞬間だ。それこそが新しい価値観であり、それを生み出す道具が自転車でもある。

自転車はまだ道具としてサッカーボールや野球のバットのように、機能が研ぎ澄まされた道具にはなり得ていない。まだハンドルを握ってペダルを漕ぎ出す以外の操作を必要とする場面がある。直感的に操作ができるとは言いがたい部分がある。しかしゆっくり走れば、人間が生活する最低限の体力でできるコトであり、そこには乗り手自身の考える以上のモノが存在する。

是非、自転車ですっきり走る「散走」をオススメしたい。自転車の新しい価値を発見して楽しむコトは、誰にでもいつからでも始められるからだ。

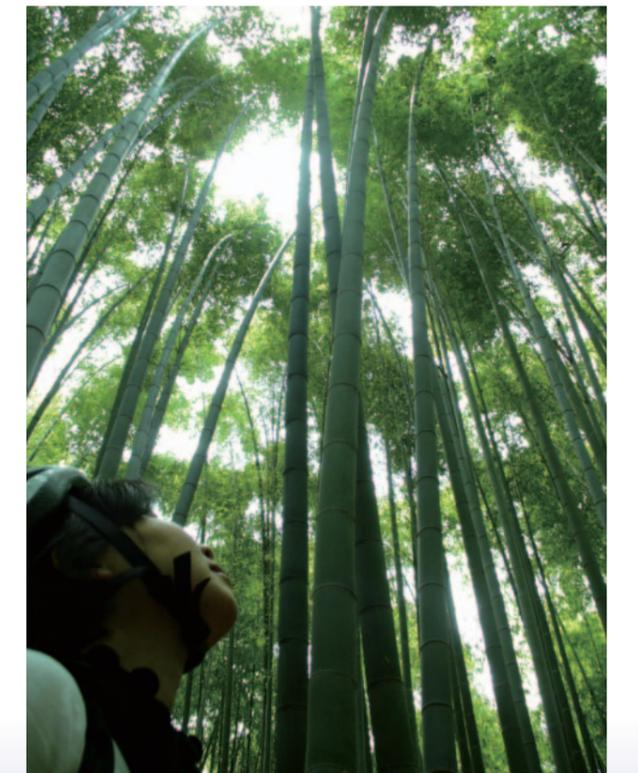


写真7 四季や時間を体全体の五感で感じる瞬間。それは普段ならば気付かなかった日常の中にある非日常